

〈公募論文〉

自然地理学と実用的人間学の連続性／非連続性

——カント哲学における人種概念をめぐって——

李 明哲

はじめに

カント¹は、継続的に人種区分あるいは人種概念に言及してきた。まず、1756年開講の地理学講義、1772年開講の人間学講義では、テーマに応じて人種を話題にしている。また、1775年から1788年までに発表された三本の人種論文では、ある程度体系的なカント人種論が展開されている。

そのなかでカントは、前批判期のみならず80年代以降も、白人以外の精神的特徴にかんして、人種差別的な叙述を残している。このようなカント人種概念にたいしては、反人種差別的観点からの厳しい批判とともに、さまざまな角度からの先行研究が議論を展開してきた。

その主な論点として、カントは、さまざまな地域の人々の身体的特徴だけでなく、各々の精神的特徴の良し悪しまでを人種概念によって語る点が挙げられる²。この点は、人類に普遍的な精神的特徴として、道徳的性格の可能性を見出さんとするカントの倫理学ないし政治哲学の主張と矛盾する。

しかしながら、いかにしてカントは、人間の身体的特徴と精神的特徴を切り分けたり、切り分けなかったりして来たのか。このことを明らかにせず、カント人種概念にかんする総合的な理解は出来ないのではないか。さらに、このことを明らかにすることは、カントが人種的偏見を明確に捨てきれなかったことの深刻さ・困難さにかんして、現代の反人種差別研究に活かすことにも繋がり得るのではないか。

上記のような問題意識を踏まえ、本稿では〈自然地理学と実用的人間学の連続性／非連続性〉という観点から、カント人種概念への再考を試みる。というのも、第一に、人種概念にかかわる身体的特徴と精神的特徴は、主にカントの地理学と人間学それぞれの講義で語られて来たからである。第二に、カントの地理学と人間学の位置付けにかんする変遷を見る限り、それらの区分(非連続性)が強調されることもあれば、逆に一体となる可能性(連続性)が示されることもあるからだ。

以下、1節から4節で、カント人種概念にかんする考え方の変遷を追いながら、自然地理学と実用的人間学は区別されながらも統合されるという、〈連続性／非連続性〉の観点を示す。5節で、この観点から、カント人種概念にかんする代表的な先行研究に分析を加える。6節で、自由と自

1 カントからの引用・参照は、アカデミー版カント全集に依拠し、巻数、ページ数の順で示した。日本語訳は主に岩波カント全集を参照し、引用文中の強調および()内の補足はカント本人による。また、[]内の補足および省略は筆者による。

2 cf. Kleingeld,[2007]p.574, Loudon[2011]p.151, Mikkelsen[2014]p.24

然の領域間の「移行」の議論と前節までの議論とを突き合わせ、最終的にカント人種概念の再考を試みる。

本稿では、カントの自然地理学と実用的人間学との関係を考察するにあたり、それぞれの刊行講義録、『自然地理学』(1802)と『実用的見地における人間学』(1798) (以下、『人間学』と略記)の内容を主に吟味するが、適宜、補足としてアカデミー版25巻・26巻所収の両講義の学生ノートおよび解説を参照する。

1. 地理学と人間学との未分化状態

カントの人種概念が、おそらく最も早く登場するのは『自然地理学』第二部第一編「人間について」、および第三部であろう(いずれも1758年以前の講義録とされる)³。

とりわけ第二部の次の引用は、カントの人種差別的叙述のなかでも最も悪名高い。「人類がその最大の完全性に到達するのは白色人種によってなのである。すでに黄色のインド人であっても、才能はもっと劣っている。ニグロははるかに低くて、最も低いのはアメリカ原住民の一部である」(IX316)⁴。ここでカントは、気候が穏やかな場所に住む諸民族のほうが、身体的にも精神的にも優れている旨を主張しようとする(cf. IX317-8)。

第三部では、世界の各大陸の特徴を概括しており、おもにアジア、アフリカ、アメリカの人々の性格・気質面にかんして、「怠惰」「臆病」「傲慢」など否定的な内容が多く語られ(「冷静」や「機知に富む」など肯定的な内容もあるが)、身体的特徴や生活習慣についても侮蔑的な表現が垣間見られる(cf. 383, 386, 389, 393, 408, 419, 429, 431, 432etc.)。ヨーロッパにかんしては、記述量そのものが少なく、その性格・気質面の叙述にかんしてはさらに少ない。

この時期のカントは、『自然地理学講義要綱および広告』(1757)でその後40年間続く講義の構成を次のように説明する。まず動物界、植物界、鉱物界それぞれを「自然の順序にしたがって述べ、そして最後に、地理学の教えるやり方で地上のすべての国々を通覧する」(II9)。さらに「その目的は、人間は住んでいる地帯に由来する諸傾向をもつことや、人間の先入見や思考様式が多様であることを示すことである」と述べる(ibid.)。ここでは、思考様式といった精神的な特徴に、居住地の環境要因が影響するというカントの考えが示されている。

また、『1765-66年冬学期講義広告』(1765)でもカントは、地理学講義の計画を拡張している旨

3 『自然地理学』は、1802年に弟子のリンクによって編纂・出版され、1923年にアカデミー版が刊行された。この講義録を考証したアディクスによれば、序論を含む第一部52節までは1775年頃までの講義(ただし11節と14節は除外)、第一部53節以降および第二、三部は1758年頃までの講義が元になっていると推定される。岩波カント全集16巻解説参照。cf. Stark[2011a]p.83

4 この引用箇所年代については議論がある。現在、編纂を主管するシュタルクによれば、当時のリンクが依拠した学生ノートが既に失われた可能性はありながらも、少なくとも現在残っている1757/9年Holsteinノートに、当該箇所の記述は無く、その前後のみが記述されている(XXVI93)。引用箇所の人種のヒエラルキーにかんして、1770年代以降に出版された旅行記や学生ノートの内容と一致することから、50年代の学生ノートのコピーが引き継がれ、書き足されていった可能性がある(Stark[2011b] pp.88-91)。シュタルクは、学生ノートをカントの「発言録」だと誤解してはならないものの、カント自身が素材を明示しなかった講義内容の実際の変遷を推論させてくれるものだと言う(Stark[2011a]p.76,79)。

を述べながら、「この学科は、自然的、倫理的、そして政治的地理学となる」(II 312)と紹介する。ここでも「世界中の人間を、自然的な特色の多様性と、それぞれの人間の間で道徳的とされることの違いに従って考察する」と述べ、世界の地理的多様性から、人間の道徳性への影響を考察するというカントの意欲が示される。

さらにこの前年に発表された「美と崇高の感情にかんする観察」(1764)でカントは、ヒュームの発言を参照しながら、黒人を貶める内容を叙述している(cf. II 253)。続けてカントは、(黒人と白人にかんして)「それほどこの二つの人種の間での差異は本質的で、心の能力に関しても肌色の差異と同じほど大きいように思われる」(II 253)と述べている。

以上のように1760年代までの地理学講義は、人間学講義と未分であり、この時期の講義録や諸論文には、人間の外見だけでなく内面にかんしても、地理的・環境的影響を見出さんとするカントの考えが散見される。そしてその中には、白人以外の精神的・道徳的特徴を貶める内容が如実に表れている。ただし以下で見ると、この未分化状態は長く続かない。

2. 人間学の分岐と「世界知(世界認識)」

1770年代のドイツは、人類学／人間学(Anthropologie)の黎明期であり、医学と通俗哲学を融合させたエルンスト・プラトナーが大きな影響力を持っていた⁵。

カントは1773年、プラトナーの書評を書いた弟子ヘルツ宛書簡で、「私の意図は、人間学によってすべての学問の源泉を、道徳、熟練、社交、そして人間を形成し統御する方法などの源泉を開き示すこと」であると述べ、まもなく人間学講義を正式科目にすることを宣言する(X 145-6)。同時にカントは「身体諸器官はどのように思考とむすびついているのか」といった「永年に不毛な探求」は行わないと言うが、これは地理学と人間学が未分化であった状態からの決別と、読み取れなくもない。いずれにせよ「日常生活においてさえ常に観察から離れないように」「自分たちの普通の経験」を言葉にし、「熟練、伶俐、さらには英知の予備的研究」に取り組む、という実用的な人間学の構想が明らかにされる(ibid.)。

「自然地理学と並んで、その他のすべての授業と区別され、世界〔世間〕知 die Kenntnis der Welt と名づけうる研究」(ibid.)とされる実用的な人間学は、地理学といかに関係するのか。ここで、地理学講義1775年 Kaehler ノートに同様の記述が見られる(cf. XX VI 299-300)、『自然地理学』「序論」の叙述を見てみよう。

自然に関する経験と人間に関する経験とが一体となって世界認識が形成される。人間に関する知識をわれわれに教授するのは人間学であるが、われわれは自然に関する知識を自然地理学ないし自然地理学に負っている。(IX 157)

このような「世界認識」についての知識をカントは「世界知 Weltkenntnis」と呼び、その第一部門を地理学、第二部門を人間学としている(ibid.)⁶。では、地理学と人間学は、最終的に連続

5 cf. Zammito[2002]pp.250-1

6 人間学講義1772/3年Collinsノートでは、「序論」で人間学と地理学による「世界知」への言及がすでに見られ

的な知識)となるのだろうか。

しかしカントは「世界知」の第二部門としての人間学を次のように説明する。「われわれの認識は人との交際によって広がる。それにもかかわらず、将来におけるこの種のあらゆる経験のためには是非とも予習をさせておく必要があって、それを人間学が行うのである」(IX157)。さらに続けて、「人間学によってわれわれは人間の実用的な事柄に精通するのであって、思弁的な事柄に精通するのではない。人間学においては、諸現象の源泉を区別するために人間が生理学的に physiologisch 観察されるというわけではなく、人間は宇宙論的に観察されるのである」(ibid.)。ここで「思弁的」でも「生理学的」でもないと言われる様に、やはり「実用的」な特徴をもって、人間学と自然地理学が区別されるのか。すなわち「非連続的な知識」となるのだろうか。

たしかに人間同士の交際や社交のための知識と、自然の一部としての人間の生理学的知識の区別はあるだろう。しかし、ここでの「実用的」の意味が、日常生活に役立つといった意味のみであれば、地理学と人間学の区別を表すには不十分である。というのも、「世界知」の第一部門としての地理学にかんしても、カントは「世界を認識するさいの予備学」や「われわれが人生のありとあらゆる場面において最も役立つことのできる認識」と表現しているからである(IX157)。

むしろ、「人間は宇宙論的に観察される」と言われたように、人間学に込められた「実用性」とは、たんなる日常生活に役立つ意味にとどまらないのではないか。これを考えるヒントは、地理学講義の広告として発表された「さまざまな人種について」(1775)にある。そこでカントは、次のように述べる。

将来のあらゆる経験をそこで規則に即して秩序づけることができるために、まえもつての概略を必要とする二つの分野が存している。つまり自然と人間とである。しかしこの両者はそこでは宇宙論的に熟考されなくてはならない。すなわち、それらの対象が別々に含んでいる独特なもの(自然学と経験心理学 *Physik und empirische Seelenlehre*)に即してではなく、対象が存していて、それぞれが自ら自分の位置を占めているときの関係全体を私たちに見て悟らせてくれるものに即して、熟考されなくてはならない。前者の教授を私は自然地理学と名付け、夏学期の講義にすることに決め、後者は人間学と名付け、これは冬学期にとっておく。(II 443)

ここで「宇宙論的」な熟考が即すべき、自然と人間それぞれの対象が位置付けられた「関係全体」を示すものとは、ここまでの議論を踏まえれば、「世界認識」という経験、ないしその知識としての「世界知」であろう。

さらに、「それらの対象が別々に含んでいる独特なもの」として「自然学」と「経験心理学」が挙げられているが、これらがそのまま、自然地理学と実用的人間学であるという説明にはなっていない⁷。そうではなく、自然地理学と実用的人間学には、以下のような前提が要求されていると考

る (XXV9)。また、1775/6年Ms 400ノート以降、人間学が「思弁的ではなく実用的」である点が強調されはじめる (XXV 470)。

7 人間学講義1772/3年Parowノート「序論」では、「経験的心理学は、自然論の一種」であり、そこでは「内官の対象」としての「魂の現象」が取り扱われるものの、「形而上学をほとんど取り扱うことができない」と主張される (XXV243)。この叙述には、バウムガルテンから引き継いだ「経験的心理学」をカントは、まずは

えられる。すなわち、自然と人間について、両者が異なる領域であるという区別は認めながらも、それらの関係全体を私たちに示す「世界知」に即して、両者を宇宙論的に熟考するという前提である。

改めて、実用的人間学の実用性とはなにか。それは、人間同士の社交などの実用性とどまらず、それと区別された領域の自然地理学が持つ実用性をも含んでおり、それゆえに「世界知」に即して人間を宇宙論的に観察できる特性だと、解釈できる。

本節での考察をまとめよう。1760年代まで未分化状態であったカントの地理学と人間学との関係は、1770年代中葉以降、自然と人間という領域の区分すなわち〈非連続性〉が設けられるも、あくまで「世界知」という全体を示す概念によって〈連続性〉が保たれている。

3. 人間学講義における〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉

本節では、〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉という観点にかんして、カント本人が編纂した『人間学』の叙述内容から確認する。

3-1. まずは〈連続性〉の観点から見ていこう。カントは『人間学』『序論』で、次のように述べる。

人間学が学校を卒業したのちに習得しなければならない世界知 *Weltkenntniß* と見なされる以上、世界中の事物の認識を列挙するだけでは、例えば国ごとや気候ごとに動物、植物、鉱物に関する知見を長々と開陳するだけでは、本来まだ実用的な人間学とは呼ばれず、人間を世界市民として認識する内容となっていてこそ、人間学は実用的人間学と呼ばれるのである。一だから、人種に関する知識でさえも、人種を自然の戯れの産物の一つと見なすあいだはまだ実用的な世界知とはいえないのであって、単に理論的な世界知と見なされるにすぎない (VII120)。

まず、実用的人間学は、自然地理学のようなたんなる自然記述とは異なる、という内容が読み取れる。そして人間を「世界市民」として認識することが、実用的人間学では求められるという、新たな視点が登場する。

そのような実用的な人間学の特徴を受けてカントは、「人種に関する知識」を取り上げ、そこで「理論的な世界知」と「実用的な世界知」を区別した上で、後者が目指される。重要なこととして第一に、理論的／実用的な世界知の区別は、世界知のなかの区別である限り、自然地理学的と実用

形而上学から切り離し、さらに「人間全体」を対象とする人間学からも切り離したという、60年代から人間学開講までの背景が表れている。このような人間学講義に独自の開講由来と、地理学と人間学が共に世界知を成すという70年代中葉の位置付けは、区別されるべきだが (cf. XXV解説Ⅷ～Ⅺ, XXIV, Brand[1999] p.9-10,15)、それゆえにこそ (本稿の立場からすれば) 人間学と地理学の連続性／非連続性という観点の必要が生じる。なお、1777/8年Pilauノートでは「魂と身体の共同」に続いて、「心理学的ではなく、人間学的に話され得る」と書き付けられている (XXV 813)。

的人間学的との区分に由来するものだと見てよいだろう。つまり世界知のなかでも人間学的知識として、自然よりも人間に焦点を当てる限り、地理学的知識は、単に理論的なものにならざるを得ない。ただしそのような区別は設けられながらも、「世界知」という地理学と人間学とが一体となる地平で、人種概念が語られ得ることもまた明らかとなる。

第二に、「世界知」として連続性が保たれる限り、実用的人間学ないし実用的世界知の「実用」性は、(2節で述べたように)社交性などの実用性にとどまらず、地理学的な実用性をも含んでいると考えられるべきであろう。というのも、カントは「人種を自然の戯れの産物の一つと見なすあいだはまだ実用的な世界知とはいえない」と表現しているように、人間学的知識の実用性は、地理学的知識の実用性とまったく断絶されたものではなく、それを踏まえた上で実現されると読み取れるからである。

3-2. 次に、〈非連続性〉の観点を見ていく。カントは、『人間学』「序論」で次のように言う。「生理学的な人間知は、自然が人間をどういう風に形成しているのかの究明に向かうが、実用的人間知は、人間が自由に行為する生物として自分自ら何を形成するのか[略]の研究に向かう」(Ⅶ119)。ここで導入された、生理学的／実用的人間知の区別は、第二部「人間学的な性格論」(以下、「性格論」)で改めて展開される。

まず、「性格論」[A 個人の性格]においてカントは、「氣立て Naturell」「氣質 Temperament」は、「人間は(自然によって)どういう風に形成されているのかが診断できる」(Ⅶ285)資質だと説明する。一方、「性格 Charakter」という資質は「人間が自分自ら何を形成する覚悟でいるのか」(ibid.)を表す。さらに「前者は感性的な生物つまり自然存在としての人間を区別する目印であるのに対して、後者は理性的な生物つまり自由を天賦された存在としての人間を二分する目印である」(ibid.)。

ここでカントは、「序論」で示した、生理学的／実用的な人間知の区別に対応させて、氣質(および氣立て)／性格の区別を説明しているのは間違いないだろう。

ところで「性格」という言葉をカントは、狭義には「理性的な生物」に備わる道徳的性格として、「氣質」と区別して使うが、広義にはその両方が含まれるものとして使用する(cf. Ⅶ285)。「性格論」における「B 男女の性格」「C 国民の性格」「D 人種の性格」は、その内容からして広義の意味であり、「E 人類の性格」のみが狭義の「性格」の定義に沿うものと考えられる。

生理学的／実用的人間知という区分、それに対応する、氣質／性格という区分では、後者が実用的人間学として目指される訳だが、3-1でみたような〈連続性〉の観点があるのであれば、この「性格論」においてどのように見出せるか。

3-3. 「E 人類の性格」では、「理性能力を賦与された動物(理性能力を備えた動物)としての人間は、[略]自分自身を理性的な動物(理性に則った動物)へと形成していくことができる」(Ⅶ321-2)と言われるように、狭義の道徳的な「性格」形成について記述される。

カントによれば、この自己完成をとおした、性格形成の方法は、「技術的な素質(意識と結合した機械的な素質)」「実用的な素質(他人を自分の意図に沿って如才なく利用する素質)」「道徳的な素質(自由の原理に則って法則に従って自分および他人に対して行為する素質)」という三段階の素質を開花させるように努力することである(Ⅶ322-4)。

実用的な素質とは「社会関係を営むなかで〔略〕礼儀を身につけ、連帯に向かう」といった「交際面での素質」であると説明される(Ⅶ323)。これは地理学と明らかに区別された、人間学特有の実用性だと言える。ただ、先の三段階において、この「実用的な素質」は、まだ二段階目である。

三段階目の「道徳的な素質」にかんして、人間個人は「本性から善悪どちらにもひきずられやすい」という問題が生じ、性格形成は自己矛盾に陥る(Ⅶ324)。しかし、カントは「類としての性格」においてであれば、「人類に自然から与えられた使命は、絶え間ない前進によって一步一步より高い善に接近していくことにありと想定することは可能」だという(ibid.)。この想定の本拠は、どこから来るのか。

カントは、人類が絶え間なく前進する想定にかんして、「人間の理性が抱く無力で儂い(これには人間自身にその責任がある)理念」と言ったり、「摂理」と表現したりする(cf. Ⅶ328)。その摂理や理念は、カントによれば、有機体としての人類が自らの「種の保存」の事実のうちに見出すものであり、さらにそれは「動植物の種の保存」にたいして想定するものより高次の原理という訳ではない(ibid.)。

この点にかんしてカントは、個々の生物の素質が「合目的に花開き、それによって、たとえその生物に属するすべての個体がでなくとも、種としては自然の意図を満たす形で、各生物がその使命を達成すること」は「自然の目的」だと述べ、「人間の場合、このことが達成されるのはただ類としてのみ」だとする(Ⅶ329)。最終的に、人間は「たえず分裂の危機に曝されながらであるが、しかしただ一つの世界市民的な社会(世界同胞主義)へと向かうようにという使命を自然から与えられていることを自覚するに至る」(Ⅶ331)のである。

すなわち、人間は自分自身で性格形成をおこなうが、それを遂行するためには、人類レベルで絶え間なく前進する想定が必要であり、その想定の本拠としては、有機的な自然存在の知識が引き合いに出されている。このようにカントは、常に自然存在の知識を踏まえるかたちで、「人類の性格」を説明している。

3-2では、地理学と人間学の〈非連続性〉として、生理学的／実用的人間知という区分、気質／性格という区分を捉えた。ここでの生理学的な気質を持つ、「感性的な生物つまり自然存在としての人間」としての側面は、実用的人間知における性格形成が一步一步目指される際、切り捨てられるのであろうか。ここまでの「人類の性格」の議論をみるかぎり、それは有機的な自然存在の知識というかたちで踏まえられているだろう。

本節では、『人間学』の叙述から、〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉という観点を確認した。ところで、そもそも『人間学』の内容がすべて、1798年という編纂時のカントの考えを表しているという訳ではない。ここで、上記の考察でポイントになる「性格」概念について、人間学講義の学生ノートを確認しよう。

1772/3年ノートで性格は、人間の感情や欲求能力を自ら使いこなす特性を指し、その由来はあくまで人間の自然本性的なものとされる(cf. XXV218,227-8, 426, 437-8)。1775/76年ノートでは、性格概念は、原則に従うための選択意志 Willkür の使用を意味し、生まれつきのものではなく、理性や心術 Gesinnung が関与する後天的なものだとされる(cf. XXV630,632-3)。さらに1777/78年ノートでは、性格への素質 Anlage は生まれつきだが、それを規定する格率 Maxim は習得するものだとされる(cf. XXV 823)。

1781/82年 Menschenkunde では、善い性格を通じて人間は、自らに固有の価値の創造者にな

ると述べられる一方で(cf. XXV1174)、性格は「内的な性格描写」(外的は人相学)に属するという括りで、いまだ才能や気質と地続きに説明されている(cf. XXV1156-7)。ところで、このノートには「四種の人種」についての短い節があり、そこでアメリカ原住民を貶める叙述のほか、黒人は「おしゃべり好きで、うぬぼれやすい」「召使いの教育のみ訓練されている」などの叙述がある(XXV1187)。これに酷似した内容は80年代の人間学草案でも見られ、そこでは「すべての人種は絶滅されるだろう。(アメリカ原住民と黒人は自己統治できない。それゆえ、奴隷としてのみ役に立つ。)白人だけがそうならない」(XV 878)などの叙述も見られる。少なくともここでは、80年代前半のカントが、人間の精神的・道徳的特徴にまで人種概念を適用し、人種差別的な叙述をおこなっていたことが確認できる。

そして1784/85年 Mrongovius ノートでは、「自然産物」としての人間の特徴として「気立て」「気質」などが挙げられる一方、「自由な存在」としての人間には「道徳的性格」が適用される(cf. XXV 1367-8)。3-2で見た『人間学』の狭義の性格概念がここでようやく登場したと見てよいだろう。ちなみにこのノートに「人種の性格」は無く、「人類の性格」では、自然体系における動物種でもあり、世界体系における理性的存在でもある人類にとって、市民的状态の完成は、自然素質の展開に基づくと記されている(cf. XXV 1415, 1425)。

道徳的性格が、気質などの生理学的特徴と厳密に区別されることで、3-3で見たような「人類の性格」の自己形成が意味をなすのであり、そこにこそ〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉が確認できる。このような人間学講義の変遷と並行して、70年代後半から80年代後半、カントは三本の人種論文を発表している。次節ではこの点を確認しよう。

4. 三本の人種論文、人種概念の理念化

まず、「さまざまな人種について」(1775)、「人種概念の規定について」(1785)、「哲学における目的論的原理の使用について」(1788)というカント人種論文全体の趣旨を要約してみよう。すべての人間は同じ「根幹 Stamm」に属し、そこから気候など(機械論的)環境要因に影響を受けて、いくつかの「変種 Abartung」が生まれた。その肌の色など、身体的形質が世代を跨いで不可避免的に遺伝することが観察された場合、「種族[人種] Race/Rasse」の区分が規定される⁸。一方、同一種族内で現れる諸特徴は「変様種 Varietät」と呼ばれ、その遺伝は不可避免的ではない(cf. II 430,435, VIII99,164)。

カントは、一作目から、人間を「有機体」として見定め、「萌芽 Keim」「自然的素質」などの「人間の変種の合目的的原因」を想定する。ただし、そこで気候や栄養などの「自然的・機械的原因」が切り離されることはなく、いかなる環境要因の下に「自己保存」の可能性を見出し得るか、という点に変種の合目的的原因が想定される(cf. II 435)⁹。

二作目で「種族」概念を規定するカントは、ある身体的特徴が種族間の混血に不可避免的に遺伝す

8 現代ドイツ語で「種族[人種]」はRasseと綴るが、当時は、カント原文も含め、フランス語由来そのままのRaceと綴られた。後述するように人間の「種Art」は一つであり、その下に複数のRaceがあるというカントの意図から「種族」と訳す場合がある。岩波全集14巻訳注(1)参照。

9 こうしてカントは、気温・湿度という機械的原因のもとで、「人類のあらゆる多様性が理解されるべき人

ることを説明する一方、同一種族内の「個人的、家族的、地域的な」(Ⅷ95)多様性は認める。三作目でカントは、その種族概念そのものが「自然のうちにあるわけではない」(Ⅷ163)と、その実在性を否定する。では、種族とはなにか。カントによれば「この表現が表示している概念はやはり、自然を観察するすべての者の理性のうち存在」し、とりわけ「観察者が自然史を意図する場合」に必要とされる概念である(ibid.)。それゆえ人類は、「自然史の体系」において、「根幹」「種族」「変種」と多様に分化するが、「これらすべては種についての単なる理念であり、生殖における最大の多様性と血統の最大の統一とが理性によって統合されうる」(Ⅷ164)。

三本の人種論文をとおして、人種概念は、自然の多様性と統一性を備えた「自然史の体系」をわれわれが意図するための「理念」であることが明らかとなる¹⁰。

さて、『人間学』「D 人種の性格」でカントは、異なる人種ごとの「気質」は記述せず、むしろ同一種族内の家族間などに見られる(広義の)性格の多様性に言及している(cf. Ⅷ320-1)。このことは、人種論文二作目で、同一種族内の多様性にかんして説明することと整合的である。さらに「D 人種の性格」冒頭でカントは、自身の人種論の概要については、1792年のギルタナー論文を参照するよう読者に述べる(cf. Ⅷ320)。たしかにギルタナー論文では、不可避的な遺伝的区分概念としてのカントの人種(種族)概念が、有機的存在にとって「自然史の原理」となり得るという内容が反映されている¹¹。

前節で見たように、人間学講義においては、道徳的性格が気質などと厳密に区別される一方、人種論文においては、人種(種族)概念は「自然史の体系」のための理念だと解釈される。このことは、人間の精神的特徴に人種概念を適用するような、人種差別的な叙述を無くすことになるのだろうか。

残念ながら、カントは人種差別的な叙述をやめていない。三作目でカントは、変種の合目的的原因にかんして、「彼らの自然本性が、ある一つの気候に完全に適合するまでにいたっていない」(Ⅷ175)として、アメリカ原住民は「労働にたいしてあまりにも無関心で」「文化的な能力がない」、さらには「他のすべてを下まわる最下層」にある黒人よりもさらに下に位置するとも述べる(Ⅷ176)。しかもこの三作目は、草稿や学生ノートと異なり、刊行物(『ドイツ・メルクア』)に掲載されている分、1788年時点でのカント本人の意図が明白だと言える。

上記に類似した、アメリカ原住民の精神的特徴を(その他の人種と比較させて)貶める叙述は、自然地理学講義の1782年 Dönhoff ノート(cf. XX VI886,901,907)や、1791年 Bergk ノート(cf. XX VI1111)でも見受けられる。また、1792年 Dohna ノートでカントは、黒人に熟練さを期待でき

間種族を四つ」(Ⅱ440)数え、「多湿寒冷地の高ブロンド人種(北部ヨーロッパ)」「(白人)」「乾燥寒冷地の赤銅色人種(アメリカ)」「多湿高温地の黒人種(セネガンビア)」「乾燥高温地のオリーブ黄色人種(インド)」を挙げる(Ⅱ441)。

10 カント人種概念研究の中には、『判断力批判』発展史との関連を示す研究も存在する。このアプローチは、カント人種論で展開される合目的性概念や目的論的思考について積極的に着目し、カント哲学内部の整合性を示そうとする。この点はMcFarland [1970=1992] pp.68-82、Zammito [1992] pp.199-201、Bernasconi [2001]pp.26-7、拙稿(李[2022])などを参照されたい。一方、本稿での考察は、カント人種概念が地理学や人間学など、あくまで経験的知識として語られてきた事実に基づいている。

11 Girtanner[1796=2014]p211, 226, 232

ない旨の叙述をヒュームから引用している(cf. XX VI1132)。

2, 3節で見てきたように、1770年代中葉以降、地理学と人間学との関係には〈連続性／非連続性〉という観点が確認できる。そのなかで、3, 4節で見てきたように、人種概念をめぐる状況には一定の変化も確認できる。一方で、肝心のカントの人種差別的叙述が無くならないことをわれわれは、どのように考えるべきか。

5. 先行研究の検討

本節では、ここまで考察した〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉の観点をとおして、1990年代から始まったカント人種概念の先行研究の中でも、主要なものをいくつか概説し、そこに含まれる問題点を浮き彫りにしたい。

カントの人種概念の先行研究は、1997年に Eze が、カント人種概念を超越論的に基礎付けられたものとして考察し、カント哲学全体が人種主義的であるという解釈を打ち出したことから始まる。Eze は、カント哲学にとって、地理学と人間学がきわめて重要であることを訴え、カントの道徳哲学は1760年代の地理学と人間学の未分化状態(本稿第1節参照)を前提にしていると主張する¹²。Eze は当時のルソーからの影響を根拠にあげているものの、そこでは、実践理性のアプリオリ性や、感性界と英知界との峻別など、批判期までに準備された内在的諸条件が軽視され過ぎて¹³。

本稿の観点から言えば Eze は、地理学と人間学の〈連続性〉だけでなく、批判期の道徳哲学までもそこに繋げて考えており、カントが慎重に設けたはずの〈非連続性〉への理解が欠けていたと言える。

Eze に比べて慎重ではありながら、その後も人種的偏見にかんするカントの影響を指摘する研究が後続する¹⁴。2007年には、Kleingeld が明確なカント擁護をおこない、そこでは人種論文三作目(1788)から『永遠平和のために』(1795)の出版までのあいだに、カントの人種にかんする考え方は転向し、人種差別的な考えから脱却したと主張される。その根拠として、『永遠平和のために』と『道徳形而上学』(1797)でカントが、植民地支配と奴隷制にたいして反対する箇所が挙げられる。ただしその転向は、厳密には1792年 Dohna ノート(前節参照)の講義後から『永遠平和のために』を執筆するさなかに起こったと Kleingeld は主張する。また彼女は、『人間学』[D 人種の

12 Eze[1997]p. 107, 130

13 直近のカント人種論文英訳集を出版したMikkelsenは、Ezeの問題点として、カントの(人種論文などで見られる)自然分類への関心を理解していない点、カントの一次資料としての情報が限定的である点、批判哲学そのものの理解が不足している点、以上三つを指摘している。Mikkelsen[2014]pp.5-6

14 Bernasconi[2001]は、西洋で17世紀に使用され始めたraceの概念史や(pp.12-4)、ビューッフォン、ブルーメンバッハ、ヘルダーら博物学者たちとの関係のほか(p.16-21,28)、「合目的性」の概念が『判断力批判』の議論にむすびつけられた可能性など(pp.27-9)、さまざまな観点から慎重に議論を進めながらも、現代にまで続く科学的な人種概念を歴史的に定着させたのはカントであることを批判する。また、Bernasconi[2011]では、Kleingeldのカント擁護にたいして、コスモポリタニズムや奴隷制反対が、人種主義の「解毒剤antidote」とはならず、歴史的には「随伴」するものだと反論している(pp. 292-5,303-4)。

性格」で同一種族内のバリエーションのみが言及されたこと(前節参照)も、カントが道徳的性格にかんする人種差別的な考えから脱却し、人種概念をもっぱら生理学的な概念として残したことの表れだと言う¹⁵。

本稿の観点から言えば、Kleingeldの考察は、人種概念に関連してきた、人間学的側面を地理学的(生理学的)側面から切り離し、その(非連続性)のみを強調している。これでは、なぜカントがこれほどしつこく人種差別的な思考から脱却できなかったのか、疑問が残る。

この点、Loudenは2011年の論文で、カントが人種差別的な考えを脱却したのであれば、その承認および以前の叙述にたいする何らかの撤回があるはずだが、それは見受けられないと指摘する。彼は、1772年に地理学と人間学が分岐する経緯を説明しながら、人間は「自然の産物」である限り、二つの区別は難しいと述べる。しかしLoudenは最終的に、カントが1760年代の地理学講義計画で掲げた「人類の大きな見取り図」(II 313)は、人種概念にかんして「ひどく歪んだ人間性の地図」という結果となったと断ずる。それに比べてカントの人間学と歴史哲学における道徳的地図は、はるかに良いもので、それに基づいて人類が世界市民的に団結するなら、「気候や土壌の局所的な偶然性は、人々の生活の中でより小さな役割になるだろう」と主張される¹⁶。

本稿の観点から言えば、Loudenは、地理学と人間学は区別できないと、その(連続性)を主張しながら、結果的にカントの人種差別的な矛盾を地理学的要素に押し付け、人間学的要素のみを擁護することになっている。筆者の考えによれば、Loudenは、Kleingeldと同様、地理学的側面を人間学的側面から切り離し、(非連続性)のみを強調するに至っている。

本稿が論じてきた(地理学と人間学の連続性／非連続性)の観点は、本節での先行研究の検討を踏まえれば、カント人種概念の取り扱いの難しさを改めて浮き彫りにしたと言える。

第一に、世界知としての連続性が認められるとはいえ、1760年代の地理学と人間学の未分化状態とは異なり、自然と人間とのあいだに設けられた区別を軽視すれば、自然と自由の原理、感性界と英知界の区別なくカントの人種概念を解釈する恐れがある。

第二に、人種差別的叙述を地理学の問題として押し込め、非連続性のみに着目した場合、地理学と人間学が、世界知として連続的でもあることを軽視しかねない。そうなると、世界市民社会に向けた前進において、なぜ有機的な自然存在の知識が関わるのか、さらには、なぜ、人間学を開講しても、批判期に入っても、カントは人種差別的叙述を捨てきれなかったのか、理解し難いだろう。

次節では、この(地理学と人間学の連続性／非連続性)の観点と、批判哲学における「移行」の議論をつきあわせ、カント人種概念の再考を試みたい。

6. 「移行」とカント人種概念

最近の先行研究であるKirklandの論文を参照すると、人種概念そのものは、超越論的な概念ではあり得ないが、経験的とも言えない。というのも人種概念は、明らかに経験の中で使用され

15 Kleingeld[2007]p.575, 586-8, 591-2

16 Louden[2011]p. 143-7, 154

ているが、経験によって科学的に成立している訳ではないからである¹⁷。

たしかに本稿4節で見た通り、人種論文において「種族(人種)」概念は、身体的形質が世代を跨いで不可避的に遺伝するという観察から導かれながらも、「合目的的原因」を持つ「単なる理念」であることが説明された。

Kirkland は、このような特性を持つ人種概念を「自然の合目的性」とおして再構成し、それが「趣味判断」と同じような権限をもって機能すると、持論を展開する。そこから彼は、自然概念から自由概念への「移行」の議論を、人種概念の問題に適用し、自然概念の管轄にある人種概念は、感性界でのそれらの目的を除外しない限り機能し続けるため、人種主義的な目的を道徳的要求によって具体的に除去することを提案する。Kirklandによれば、ここでやろうとしていることは、二世界論の否定ではなく、自然と自由に区別された世界が変化のないまま両立することの否定であり、移行の可能性の追求である¹⁸。

上記のような Kirkland の考察は、人種概念が完全に経験的なものではない特性を活かし、批判哲学における「移行」の問題を現実的な反人種差別的な行動へ結びつける点が新しいと言える。しかし、移行としての人種主義的な目的の除去作業はいつ終わるのか。まさに「人類の性格」で語られたように「絶え間ない」作業となるのであれば、わざわざ「移行」と人種概念を結びつけて論じる意義に疑問が生じる。そこで、以下では移行そのものではなく、移行を目指す私たちの経験的諸概念のあり方に目を向けてみたい。

まず、本稿でとりあげた、人種概念がかかわる叙述内容は、経験的な知識(真偽は別として)だといえる。また、その知識が語られた地理学と人間学は、形而上学や批判哲学と峻別された「経験的部門」に属する(cf. A840, IV387-8)。

そして『判断力批判』『現行序論』『Ⅱ 哲学一般の領域について』で、「移行」について論じられるが、その直前にカントは、自然および自由概念に関係づけられた対象が認識可能な部分を「地域 Boden」と呼び、その地域のなかで概念が立法的である部分を「領域 Gebiet」と呼ぶ(V174)。ここで「経験的諸概念は、[略]自分の地域をもつが、領域は持たない」と言われるように、地理学と人間学で語られる、人種などにかんする経験的知識は、「地域」のみに関わる(V175)。

重要なことに「領域」は、悟性／理性という認識能力が、「経験という同一の地域のうえで二つの異なる立法をもつ」限りで、自然／自由概念という二つの立法的領域に分けられる。つまり一方で、悟性はその立法にたずさわる自然概念の領域、他方で理性がその立法にたずさわる自由概念の領域が存在するが、カントによれば「これら二つの異なる領域は、各自の立法では相互に制限しない」(ibid.)。

しかしながら同時に、二つの異なる領域は「経験という同一の地域」を持つのであった。カントは「[二つの異なる領域は] 感性界における各立法の結果のうちでは絶えず制限しあっており、一つの領域を形成することはない」と述べる(ibid.)。これは、自然法則にしたがう現象も、道徳法則にしたがう行動も、どちらも感性界としての地域で、実現することを考えれば、理解しやすい¹⁹。

17 Kirkland[2017]p.31

18 ibid.p.31, 35-7 人種概念と趣味判断とを同様に扱う点にかんしては、『判断力批判』テキストとの整合性の問題など、今後の検討を要する。

19 cf. Bojanowski[2018]p.27

そして、自由概念の領域のみ「超感性的なもの」の理念に「実践的実在性」を与えることができるため、移行そのものは、「感性的なものとしての自然概念の領域」と「超感性的なものとしての自由概念の領域」との間で行われる (ibid.)。

ただ本稿にとって重要な点は、移行そのものよりも、移行が「領域」間で行われる際も、その共通地盤として「地域」が存在する点である。この観点から、地理学と人間学の関係を考えてみる。「領域」における自然と自由(道徳)という立法的概念の区別に沿って、「地域」において自然と人間という区別が設けられたとしても、あくまで地理学と人間学の連続性は、その経験的な「地域」に確保されることになるだろう。

このように、〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉の観点は、批判哲学での「移行」を目指す、私たちの経験的諸概念のあり方にまで一貫して確認できる。このことが直ちに、なぜカントが人種差別的な叙述を撤回しなかったかを説明する訳ではないが、少なくとも以下のような、カント人種概念および人種差別の取り扱いに、一定の方向性を示すことが可能であろう。

3節で見たような「人類の性格」形成における「絶え間ない前進」において、人種差別の問題はどこかでクリアされる自然地理学的な課題として、矮小化すべきではない。すなわち、われわれは、実用的な社交的課題にこそ集中すべきだと考えるのではなく、人種差別の問題を常に“絶え間ない課題”として認識し続ける必要があるだろう。

おわりに

本稿はカント人種概念をめぐり、1770年代中葉以降、〈地理学と人間学の連続性／非連続性〉の観点が一貫して確認できることを示した(1~4節)。この観点の欠落は、カント人種概念の取り扱いの難しさを見誤る可能性があり(5節)、むしろこの観点を批判哲学の「移行」の議論にまで徹底することで、人種差別の問題を、人類の絶え間ない課題として導くことができる(6節)。

ところでカントは、人種概念を「自然史の体系」のための理念と考えた(4節)。この点は、本稿が6節で「移行」の議論に及ぶ背景とはなっているが、その理念そのものが有する合目的性概念の検証などは、カント歴史哲学との関係を含め、今後の課題とせざるを得ない。

最後に、現代社会を生きるわれわれは、遺伝子工学などの驚異的な技術発展により、人種概念の科学的有効性を否定する傍ら、社会的には新たな人種差別を再生産し続けている。このような自己矛盾に陥りがちな状況に向き合い、人種概念そのものにたいして歴史的、人文科学的にアプローチするためにも、本稿でのカント人種概念の再考は有効であろう。

引用文献

- Bernasconi, R, 2001, “Who invented the concept of race? Kant’s role in the Enlightenment construction of race.”, in *Race*, Oxford: John Wiley & Sons, 11-36.
———2011, “Kant’s Third Thoughts on Race”, in *Reading Kant’s Geography*. State University of New York Press, 291-318.
Bojanowski, J, 2018, “Kant über das Prinzip der Einheit von theoretischer und praktischer Philosophie (Einleitung I-V) .”, in Höffe, Otfried (Hg.): *Immanuel Kant: Kritik der Urteilskraft 2. Auflage*, Berlin:

- Walter de Gruyter, 21-36.
- Brand, R, 1999, *Kritischer Kommentar zu Kants Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, Hamburg: Meiner.
- Eze, E.C, 1997, “The Color of Reason: The Idea of ‘Race’ in Kant’s Anthropology.” in *Postcolonial African Philosophy: A Critical Reader*, ed. Emmanuel Chukwudi Eze, Cambridge: Blackwell Publishers, 103-131.
- Girtanner, C, 1796, *Concerning the Kantian Principle for Natural History* (trans. Mikkelsen) , in Mikkelsen, 2014, *Kant and the Concept of Race*, SUNY Press. 209-232.
- Louden, R.B, 2011, “The Play of Nature.”, in *Reading Kant’s Geography*, State University of New York Press, 139-159.
- Kleingeld, P, 2007, “Kant’s Second Thoughts on Race.”, in *The Philosophical Quarterly*, 57,573-592.
- Kirkland, F.M, 2017, “Kant on Race and Transition.”, in *The Routledge Companion to Philosophy of Race*, Routledge, 28-42.
- Mikkelsen, 2014, *Kant and the Concept of Race*, SUNY Press.
- Stark, W, 2011a, “Kant’s Lectures on “Physical Geography” A Brief Outline of Its Origins, Transmission, and Development: 1754-1805”, (trans. Olaf Reinhardt) in *Reading Kant’s Geography*, State University of New York Press, 69-85.
- 2011b, “Historical and Philological References on the Question of a Possible Hierarchy of Human “Races,” “Peoples,” or “Populations” in Immanuel Kant— A Supplement.” *ibid.*, 87-102.
- Zammito, J, 1992, *The Genesis of KANT’s Critique of Judgment*, University of CHICAGO Press.
- 2002. *Kant, Herder and the Birth of Anthropology*. Chicago University Press
- マクファーランド, J.D(副島善道訳), 1992, 『カントの目的論』, 行路社.(McFarland, J.D, 1970, *Kant’s Concept of Teleology*, University of Edinburgh Press.)
- 李明哲, 2022, 「カント人種論における合目的的体系 – 批判哲学との関連 –」, 『哲学』(日本哲学会), 第73号, pp.391-407, 知泉書館.

* 本稿は、JSPS科研費(課題番号20K12783)による研究成果の一部です。